

『浮世風呂』に見る仙台浄瑠璃に関して

長崎靖子

一 はじめに

本稿では式亭三馬の『浮世風呂』に見る仙台浄瑠璃（奥浄瑠璃、御国浄瑠璃と呼ばれることもあるが、ここでは『浮世風呂』で使用されている仙台浄瑠璃という名称を用いる）を取りあげる。式亭三馬の『浮世風呂』前編巻之下には、座頭が仙台浄瑠璃を語る場面が見られる。「湯の中でおつな声がするぜ」「ほんにナア」「あれは座頭の坊が来たから、大かた仙臺浄瑠璃だらう」という会話に続き、仙台浄瑠璃が語られる場面である（以下天理大学図書館所蔵版本からの引用。／は改行部分）。

二〇オ「さる程に爰に又、九郎判官義經どのか八島をさして／＼下らる、引、扱早其日の出立には、上には赤地の錦の直衣を引張り、／＼下には紺の布子のどてらを引張り、引、附属ふ御供には亀井／＼片岡伊勢駿河、西塔の武藏坊、彼等なんどが御供にて、尻から／＼泥水の流れるやうに下らる、引、其翌も下らる、引、又明後日も下らる、引、めつたやたらに下らる、引、⁽¹⁾

この仙台浄瑠璃の場面には「九郎判官（くろうわん）くわん」や「錦（にしき）」等の白圈（しろきにこり）や力行に付された半濁音

符などの特殊表記が見られ、これらの特殊表記やその発音に関しては、様々な論考がなされている。⁽²⁾ また、『浮世風呂』に見る仙台浄瑠璃に関しても複数の論考が見られる。しかし、この仙台浄瑠璃が三馬の創作したものであるのか、それとも実際に語られていたものであるのかに関しては諸説があり、いまだに不明な部分である。そこで今回は仙台浄瑠璃に関するこれまでの研究を整理しつつ、改めて『浮世風呂』の仙台浄瑠璃について考えてみたいと思う。

二 先行研究による仙台浄瑠璃の定義

小倉博（一九三二）では、仙台浄瑠璃に関する纏まった研究は大槻文彦の「仙臺浄瑠璃の考」（大槻文彦の明治四十三年十一月十六日の日記）が最初であるとする。「仙臺浄瑠璃の考」の冒頭は次のようである（『仙台叢書』第6巻（一九二九）所収より引用。以下大槻（一九一〇）とする）。

仙臺浄瑠璃は舊仙臺領中に古くより語り傳へしものにて江戸の頃は江戸よりは奥浄瑠璃又は仙臺浄瑠璃と稱したり。其傳來の年代分明ならず。其道の者も傳へず。然れども天正年中に奥州の白河に座頭ありて浄瑠璃を語りし事物見えたれば古きものな

そして続いて

三七二頁

仙臺淨瑠璃は如何なるものかといふに。右の古淨瑠璃⁽⁴⁾の最も古き淨瑠璃の上國にては全く廢れたるが、獨り仙臺のみ残りしものと考ふ。其證は薩摩治郎兵衛といふ淨瑠璃語り「鎌田の正清」「がうの姫」「阿彌陀の胸割^{むなわり}」などいふ淨瑠璃を語り始め同時に六字南無右衛門といふ女の太夫が幸若の舞に舞ふ。「八島」「高館」「曾我」など語り始むと物に見えたり。此二人徳川氏の世の初の者なり。而してその「阿彌陀の胸割」「八島」といふものに仙臺淨瑠璃に存せり。

三七二—三七三頁

と、古淨瑠璃との關係を述べている。小倉（一九三二）は、この古淨瑠璃との關係をさらに次のように記している。

實際御國淨瑠璃は、書遺されているのを見ても、現に語るのを聞いても、古淨瑠璃の原形をそのまま保存してゐるのは殆ど無い。外題の古淨瑠璃と同じなものでも内容や文句に多少の轉訛があり、或は全く古淨瑠璃に見出されさうもない外題のがあり、又取材の上から見て仙臺地方で特に作られたらしく推察されるものもある。況や現に近松物などを語る事實や、軍談ならば何でも語るといふ説のあることを考へると、御國淨瑠璃は、かなり複雑な性質を有つてゐるものである。

一六八—一六九頁

小倉巖（一九五八）では、これらの先学の論考から、
奥淨瑠璃・仙台淨瑠璃・御國淨瑠璃と言われるものは、古淨瑠

璃もしくはその仙台地方化したものを主とし、またそれらの形式体裁を模倣して作ったものと、近松の改作などでなつたものをいうのであり、特に仙台地方で創作したものとと思われるものの中には、地方的題材により地方色豊かなものが多い。

七一七頁

とまとめている。
本稿で使用する「仙台淨瑠璃」の名称は、この定義に沿つて使用することにする。

三『浮世風呂』と同系統の仙台淨瑠璃

さて、前掲の大槻（一九一〇）では、『浮世風呂』の仙台淨瑠璃と同系統の仙台淨瑠璃として、常磐津節の『蜘蛛絲梓弦』で語られる仙台淨瑠璃、並びに仙台淨瑠璃本とされる『義経記奥州本』をあげ、次のように述べている。

右等の文は土語訛言あること甚し。然れども正しき仙臺淨瑠璃の文は足利文學を受けたる麗はしきものにて。斯る卑俚なる用語決してなく「べい」「でかばちない」などといふ類の語の一處もなき事前に處々に擧げたる淨瑠璃の文にて知るべし。されば右等の文は奥州人の発音の濁りて訛も多く語るを聞きひがめて妄想し。作者の新に模擬捏造して滑稽の筆を弄したる文なること疑うべきなし。但し。盲人殊更に袴の脊をねぢりてはきなどして村々を廻り土語にて滑稽卑俚なる事を語りて錢を乞ふことはあり。然れども是れは物語りと稱して固より淨瑠璃にはあらず（略）

三八八頁

また、小倉（一九三二）でも、『浮世風呂』『蜘蛛絲梓弦』の仙台浄瑠璃、『義経記奥州本』を

御國浄瑠璃と稱するもののうちで、多少の轉訛があるにしても古浄瑠璃の面影を十分に保有するもの、及この地方で特作されたものでも、この結構が傳奇的で、其の文體の特殊な點で古浄瑠璃の型を取つたのを、御國浄瑠璃の正系と見做し、近松以下のものや、一般軍談類を語るのや、『義経記奥州本』（改訂史籍集覽所収）「常磐津蜘蛛の絲」「浮世風呂」にあるやうな、殊更に卑俚な言葉を弄したのは、偶發的のものとして姑く御國浄瑠璃から除外するのが穩當であらう。要するに御國浄瑠璃は古浄瑠璃（多少の轉訛を伴つて）又は古浄瑠璃の型を模して作つた浄瑠璃を仙臺特有の曲節で語るのである。

一六九頁

とし、この三種の仙台浄瑠璃を「正系」の仙台浄瑠璃からは外している。

以上、大槻（一九一〇）も小倉（一九三二）も『浮世風呂』の仙台浄瑠璃や同系統の仙台浄瑠璃に関しては、正當な仙台浄瑠璃とは認めてはいない。さらに大槻（一九一〇）では、この一連の仙台浄瑠璃は「奥州人の発音の濁りて訛も多く語るを聞きひがめて妄想し作者の新に模擬捏造して滑稽の筆を弄したる文なること疑ふべきなし」と、作者の創作であると述べている。

ところで、これら一連の仙台浄瑠璃は、個別にはどのような評価がなされているのであろうか。『蜘蛛絲梓弦』に関しては、管見の限り、仙台浄瑠璃に関わるまゝまった論考は見られない。そこで、次に『義経記奥州本』、そして『浮世風呂』に見る仙台浄瑠璃に関

する論考を見ていくことにする。

四 『義経記奥州本』

『義経記奥州本』は、近藤瓶城の『史籍集覽』第十六冊（一九〇二）に収載されている。本文末尾には「安永八年己亥正月二十六日」とあり、その脇に「以水戸彰考館古藏本贍之／明治三十五年十月再校了」、下に「近藤瓶城校／同恵造」と記されているという。本書は『彰考館圖書目録』にも掲載されており、現在も彰考館文庫に所蔵されているものと思われる（原本は文庫が閉館中のため未調査である）。

本書は、その内容から流布本『義経記』の「衣川合戦の事」を下地に作られたものとされる（稿者が確認できたのは寛文十年刊の流布本である）。『義経記奥州本』の一部を『史籍集覽』から引用する。

何はあ、長崎太夫のすけをおつはじめ、三萬よきか一手になつてたかだちの御所へおしよせた、今日のうつ手は、いかなる者ぞとつたれば、やすひらが家の子に、長崎太郎太夫といつた、そこで判官殿がはら立つてせめてやすひらにしき、なんどで、あんべいなら、さいこの軍をしもしべい、あづまの方のやつばらが、郎等どもにひん向ひ、弓をひいたり矢をいるは、かつたいとほううちだ、あれらが手にはかゝるまい、いつくの事にいさきよく、じがいをすべいとおししやつた、

（中略）

其義は心得申したと、みすを引あけつくくと、君のしやつたらうちまもり、なごりおしげにないたまさ、かたきのちかく聲をき、御いとま申すと、ついたつたが、又立かへり、此やう

な歌をよんであげたもさ、

六ツの道のちまたに我をまてよ君おくれさきだつたかひありとも

かくいそがしいそのなかにも、君を思つてみらいまで、はなれぬ心がたのもし、御返歌に、

のちの世もゆかりかはらで紫の雲のむかえにとともにのほらんとおもしやつた^レれは、辨慶は聲を立ててないた^ッげだ

『史籍集覽』第十六冊

「別記第二百七十八 義經記奥州本」より

この『義經記奥州本』は、幸田露伴の『蝸牛庵聯話』（中央公論社 一九四三）にも収載されている。この中で露伴は、『義經記奥州本』に関し次のように記している。

奥淨瑠璃は芭蕉の頃既に鄙びたるものとして見られたること七部集の聯句にも見えたり此は淨瑠璃といふにもあらず、義經記を奥州語もて譯したるが如きものなり。題して義經記奥州本といふといへど、義經記奥州本といふもの有りて、これたゞ其の一部の残存したるものならんとは考え得難し。安永八年己亥正月二十六日以水戸彰考館古藏本贈之と奥書あるも、傳來定りならず、むしろ安永、若くは安永を距ること遠からぬ頃に成りたるものかとも疑われる

九二頁

そして、『義經記』にある弁慶と義經の最期のやり取りの歌と『義經記奥州本』の歌を比較し、

文中の判官の歌、義經記には

後の世も又のちの世もめぐりあへ染む紫の雲の上まで、とあり。

此野鄙なる文中の歌の方、これに比べては却つて技巧長けたるは怪しむべし。或いは疑ふ、此一巻は、何人かの戯作に出でたるなるべきを。若し然らんには安永前後の言語を考へんよりほかには取るところ無し。安永前後の言語を考へんには其材甚だ多し、是の如きの書を取るを要せず、たゞ其文詞、滑稽粗野、人をして笑を發せしむるを閑談の資として取るべきのみ。

九二—九三頁

とする。『義經記』にみる義經の歌（流布本『義經記』も同じ歌である）は、弁慶の「六たうのみちのちまたにまてよきみおくれさきたつならひありとも」に対する返歌である。一方『義經記奥州本』では、弁慶の歌が「六ツの道のちまたに我をまてよ君おくれさきたつたかひとありとも」、対する義經の歌は「のちの世もゆかりかはらで紫の雲のむかえにとともにのほらん」とある。本書の中で露伴は『義經記奥州本』の義經の歌の方が「却つて技巧長けたる（九三頁）」と考えており、この点から「何人かの戯作に出でたるなるべき（九三頁）」と推測している。

湯澤幸吉郎（一九三二）「奥州本義經記の考察」では、『義經記奥州本』の言語的考察が行われている。本論考の中で湯澤は、『義經記奥州本』に関し

この書は、一部指揮者の間には注目されたものと見えて、藏田國秀氏の義經記講義（明治三十五年七月發行）の緒言にも言及してあり國語調査委員會編纂口語法別記（大正六年四月發行）にも引用してある（第七十一頁）が、一般には餘り話題に上らなかつた様である。

五三頁

と記す。さらに「後人の偽作なることは、先輩の説であれば、とるに足らず」という藏田氏の言に関し、これを「義経記と同時に（すくなくとも餘り隔らぬ時代に）出来たものでなく、遙か後世に、あたたかも奥州で別に独立して語り傳へたものであるかの様に思わせようと、故意に作為したものであるとの意味であらう。（五四頁）」とする。

湯澤（一九三二）では、『義経記奥州本』と流布本『義経記』（寛文十年版 正宗敦夫編 日本古典全集『義経記』）の本文比較の中で、「古代語で二段活用として用いた動詞を、本書で一段活用にしたのが多い」「動詞を打消すのに「ない」を用いた例が見える」「動詞「べい」を文の終止に用いている」等、語法上の相違をあげる。また、奥州方言に関しては「イエ、シス、チツ、ジヂヅの混合（中間音）、語間・語尾にある加行音・多行音を濁音にする現象などは、殆ど現れて居ない」こと、「形容動詞の一種の連體形を「静かだ人」「立派だ家」のやうに「……だ」とする」のが今日の東北地方の特徴であるが、この形が見当たらないこと、東北方言の特徴である方向を表す「さ」の使用が、「高館の御所へ」「辨慶は表へ出て」等使用されていない部分がある等、奥州方言の言語描写としては疑わしい点をあげる。そして、「本書はおそらく江戸時代の好事家が、流布本の義経記の一部を、奥州言葉に翻譯したものであらうと思ふ（六五頁）」と結論付けている。

五 『浮世風呂』の仙台浄瑠璃に関して

これまで紹介した先行研究では、一連の仙台浄瑠璃が後世著者の創作であったことを匂わせるものが多い。先の大槻（一九一〇）は

「作者の新に模擬捏造して滑稽の筆を弄したる文」であると、また幸田（一九四三）は『義経記奥州本』を「何人かの戯作に出でたるなるべき」、湯澤（一九三二）は「江戸時代の好事家が、流布本の義経記の一部を、奥州言葉に翻譯したもの」と考えている。

一方、『浮世風呂』に見る仙台浄瑠璃に関しては、実際に三馬がこれを耳にし、作品に利用したと考える論も見られる。成田守（一九八五）では、『浮世風呂』の仙台浄瑠璃を、

「御代もかさねし万々歳。貴賤上下おしなべてかんぜぬものこそなかりけれ」で一篇の平家の語りが終了したことになるのであるが、原文に「中略」とあるので、三馬が知っていた語りはもっと長かったであろう。全体の口調からして語りを耳にして挿入したものであろうし、あえて東北弁とも江戸弁ともいえる口調をあてている。全体として野鄙な滑稽身を三馬は強調しているともいえるが、元来こうした内容のものが盲人たちの語りの一つとして伝えられていたのであった。

二二頁

と、実際の語りの中から取材したと述べており、「このことから、少なくとも文化年間ごろには江戸にも仙台浄瑠璃を語る座頭たちがやってきており、滑稽味をおびた語り物をもしたことを文人たちはよくしっていたといえる。（二二頁）」とする。

神戸和昭（一九九三）では、『浮世風呂』に見る合拗音の表記に焦点を当て、その表記から江戸語、上方語、そして仙台浄瑠璃に見る方言の写実性の検証を行っている。神戸は、仙台浄瑠璃の合拗音の表記、仙台浄瑠璃中の「は」を「ふわ」とする表記、さらには白圈などの特殊表記を用いる三馬の描写態度を通し、

三馬が音声上の微細な部分にまで意を用い、浄瑠璃の内容上・文脈の展開上重要と思われる部分に特殊な発音を表すための独自の表記を工夫していたことは事実で、それは即ち、この仙台浄瑠璃の描写において、三馬が出来るだけその臨場感を出すべく務めたことの表れと言つてよい。しかも、そのためには、当時、江戸の人々に広く知られていた仙台浄瑠璃について、全くの荒唐無稽な描写をしたのでは意味がなばかりか、かえって逆効果となつてしまうことを考えれば、戯作特有の誇張はあつたにしても、現実の仙台浄瑠璃の語りにおける音声上の特徴的部分をかかなりの程度把握しているということが、前提条件となつてくるわけである。

一七—一八頁

とする。そして「その意味において、この仙台浄瑠璃の描写は写実的であると言える（一八頁）」と結んでいる。

これらは、『浮世風呂』の仙台浄瑠璃が全くの創作ということではなく、江戸の町で実際に語られていたものであり、これを聞いた三馬が『浮世風呂』に採り入れたものとする考えである。

六 『浮世風呂』の仙台浄瑠璃と早物語

『浮世風呂』に見るような仙台浄瑠璃が実際に語られていたとすれば、その滑稽な語り口はどこから生まれてきたのであろうか。小島環礼（一九六九）では、『浮世風呂』の仙台浄瑠璃を「早物語の文章表現の技巧に共通している（二頁）」とする。「早物語」は、『日本大百科全書』19（一九八八 小学館）に次のようにある。

語り物の一形式。ユーモラスな物語を早口で語つたのでこの名

がある。室町時代には琵琶法師が平曲を語る弾奏の間に、修行中の小法師などが息抜きのために間（あい）狂言として一氣に語るもので、莊重な物語の緊張感をほぐすために行うものであった。近世に入ると、浄瑠璃を語る間にも早物語が行われた。平曲や浄瑠璃より早物語のほうが巧みな盲僧もあつた。（中略）東北地方の奥浄瑠璃や北陸地方に資料が残されている。

八七頁

武田正（二〇〇五）『天保元年やかんの年…早物語の民俗学』（岩田書院）では、「早物語の成立は、「平家語り」の練習の中で始まつたという（八頁）」と記す。そして、

奥浄瑠璃語りの座頭は、一人二人の弟子をつれて地方を歩き廻つたのであるが、時には弟子なしにあるくこともあつたようである。弟子を伴うときには、聴衆の集まつた座を巧みに零開気を醸成するために、弟子が早物語を語つたりしたものだといふが、弟子を伴わないときには、前座なり台間、後座での要望に対して、師匠自ら早物語を語ることもあつたという。

九八頁

と、早物語が仙台浄瑠璃の中でも語られるものであつたことを述べている。

小島（一九六九）では、このユーモラスな早物語の語り口が『浮世風呂』の仙台浄瑠璃に影響したと推測する。小島は、『浮世風呂』の仙台浄瑠璃の中で弁慶が謎解をする場面、さらに弁慶の平家の武者との戦いに奮闘する場面に関し

修羅場の戯笑化に、この語りのおもしろみがある。軍記物のもじりは早物語の方法の一つである。本来、早物語は、琵琶法師

によって、平曲にもなつて語られていた。平曲のパロディーが、早物語として用いられるのは、自然の成り行きであつた。これは、判官物化した源平合戦のパロディーである。

四頁

とし、

『浮世風呂』の仙台浄瑠璃なども、そうした既成の文芸を借用する方法の一例だったのであるかと思う。登場人物の滑稽な行動によって笑いを誘う以外に、語りの趣向によって笑いの文芸を作品の中に導入して、間接的に笑いを起すという方法が、滑稽本の趣向の中には見られるのである。

八頁

と結んでいる。作者の創作か否かに関しては「三馬のでつちあげであるかもしれない（五頁）」と述べる一方で「三馬がしかるべき典拠によつてこの仙台浄瑠璃を描いていることは、想像できないことではない（五頁）」とも記しており、どちらであるかは明示していない。

武田（二〇〇五）では

奥浄瑠璃は、江戸の浄瑠璃に比較して、評判は必ずしも良いとは言えなかつたようで、東北人以外の人の耳には特にそうであつたのだらう。喜多村信節も『嬉遊笑覧』で「聞にもたへぬもの」と言つており、三味線もなく扇で拍子をとることを、いささか田舎の浄瑠璃と見ていたのかも知れない。また技巧に乏しく単調である上に、朗読調で、「三味線同じ事斗弾く。節もなし」と、中山高陽は『奥游日録』に記している。

九八頁

とする。『浮世風呂』に記されたような仙台浄瑠璃が実際に語られていたとすれば、それは単調でおもしろみのないとされる「正系」の仙台浄瑠璃の欠点を補うべく作られたものではないだらうか。江戸での人気を得るために訛りを強調し、また早物語等の趣向を取り入れることで、大槻（一九一〇）でいう「正しき仙臺浄瑠璃」とは異なる滑稽な語りの仙台浄瑠璃が形成されていった可能性は考えられるだらう。

七 仙台浄瑠璃の『浮世風呂』への受容

以上、『浮世風呂』と同系統の仙台浄瑠璃に関するこれまでの論考を整理してきた。『浮世風呂』の仙台浄瑠璃が三馬の創作か実際の語りを聞いたものであるかは、まだ確固たる結論が得られたわけではない。が、稿者としては、『浮世風呂』の仙台浄瑠璃は実際に語られていたものに基づいて描かれたのではないかと考えている。小島（一九六九）では、仙台浄瑠璃の場面の一部に、狂言に見る早物語の趣向の平曲が語られているとする（注8参照）。また、武田（二〇〇五）では「弟子を伴わないときには、前座なり合間、後座での要望に対して、師匠自ら早物語を語ることもあつたという」とし、仙台浄瑠璃語りが自ら早物語を語る場合もあつたとする。

三馬は、この手の滑稽な早物語を含んだ語り口の仙台浄瑠璃を聞き、それを著作に利用したのではないだらうか。先にあげた神戸（一九九三）の中では「当時、江戸の人々に広く知られていた仙台浄瑠璃について、全くの荒唐無稽な描写をしたのでは意味がないばかりか、かえつて逆効果となつてしまうことを考えれば、戯作特有の誇張はあつたにしても、現実の仙台浄瑠璃の語りにおける音声上

の特徴的部分をかなりの程度把握しているということが、前提条件となってくるわけである。」とある。あるいは三馬による創作の部分もあったのかもしれないが、実際に語られていた本物の音声があったからこそ、三馬はその音声を細かく描写すべく、表現技巧として特殊表記を使用したのだと考える。

八 おわりに

小倉（一九三二）では、「正系」な仙台浄瑠璃自体も、その性格上、本の形で残されることはほとんどないという。従って、仙台浄瑠璃の典拠本を見つけ出すことはかなり困難と思われる。

そこで、今後は、今回、単独での論考がなかったため本稿で取り上げなかった『蜘蛛絲梓弦』に見る仙台浄瑠璃を資料に、考察を進めていきたいと思う。『蜘蛛糸梓弦』の仙台浄瑠璃には、当時流行していた中国物『史記』の「鴻門之会」における樊噲の逸話が語られている。この『蜘蛛絲梓弦』の仙台浄瑠璃の趣向は大田南畝の狂歌にも詠われており、当時大いに評判を得たとされる。¹²『蜘蛛絲梓弦』が評判を得たのは、当時流行していた中国物を扱った仙台浄瑠璃が実際に語られていたという事実があったからではないだろうか。

『蜘蛛絲梓弦』は『降積花二代源氏』の所作事であるが、現在では常磐津節の舞踊曲として残されている。従って実際に語りの音源を聞くことができる。稿者は現在国会図書館所蔵の常磐津節『蜘蛛絲梓弦』を調査中であるが、その中の「門の開ヶもんのひらけ」という部分に、「ん」の下の「を」が「の」にかわるといふ仙台浄瑠璃の語り癖があることを見つけた。¹³このような音源を利用した調査も進めながら考察を行っていきたいと考えている。

注

続きは次の通りである。

二〇「扱早御大將も、長旅路の事／なれば、草臥果だよ。ナント弁慶、何曾をかけべいが解く氣は無／二〇ウ かじさ、おきやり申せば弁慶は、御大將の／事だあ物、随分謎を解／ますべい、そんなら謎をかけべいか、そも／真桑瓜と分けて何と／解と、おきやり申せば弁慶は、少しばかりは小首かたぶけ居たりけ／り引、やう／思按が附たつけど、夫は何より／心易し、そも／真桑瓜と／かけては、依藤太秀郷と解ます、其心はあんだんべ、むかでかな／はぬと解たりけり、御大將我折果だよ、コリヤ又弁慶は日本一の謎／解の名人たど、よろこびいさんで八島の浦へ着にけり、扱い／さば早／でかばなく起つたア「爰に西塔の武藏坊弁慶、柄も四尺刃も四尺／三、あはせて／八尺の長刀をふりまはすから、傍あたりの鼻があぶねへでゑすは、いしやア／長刀ア／何處からつん出した、巾着からつん／出した、いしやア／爰来う／首斬べい、おきやり／申せば平家の軍勢／そら弁慶が怒たぞ、臍の下では桑原／頭の上では万歳樂と／遊まはるを、真額梨割／車斬、あたま切らる、やつもあり、腕を切／らる、やつもあり、されども／怪我はなかりけり、コリヤ、たまらぬと軍／勢ども、そこらあたりの缺を拾つて縫／うほどに、／臍のかけをば／か、とへ縫／う、か、とのかけをば臍へ縫／う、あ／かあがり切らずも／三ッあり、か、とへ縫の生るもあり、おつかけまはつて弁慶が三尺あまり／のめ、ずのとげを、あたまの、どののくどへ、ふんづらぬいたッけ、是には／何がよかんべい、ハテ脆豆腐の黒焼がよかんべいとぞかたりける、中／御代もかさねし万歳、貴賤上下おしなべて感ぜぬ者こそ／なかりけれ

- (2) 坂梨隆三（一九七五）「三馬の白圀（しろぎに）について」、棚橋正博（一九九四）「式亭三馬―会話を精細に描く作家」、広川京一（一九七七）「式亭三馬の「白圀」に就いての研究」、山本淳（二〇〇五）「式

亭三馬作中における白圈点の使用について」等。

- (3) 大槻（一九一〇）では『奥羽永慶軍記』の「其比○天正 白川ニ座頭有テ尼公物語ノ浄瑠璃ヲ語ル奥州ノ佐藤兄弟共ニ君ノ命ニ代リテ死ストイフ事ヲ聞テ和田落涙スル事限リナシ」をあげている。

- (4) 大槻（一九一〇）ではこの前文に、江戸時代に竹本義太夫、また近松門左衛門が現れ津に至り、「これを當流と稱し元禄のものは古流又は古浄瑠璃と稱せられて悉く廢るゝに至れり（三七二頁）」とある。

- (5) 「右等の文」とは、『浮世風呂』の仙台浄瑠璃の他、『蜘蛛絲梓弦』の仙台浄瑠璃、仙台浄瑠璃本『義経記奥州本』を指す。

- (6) 『彰考館圖書目録』「多部」に「義経記 奥州本 一 寫」（二〇八四頁）とある。

- (7) 『奥の細道』にも塩竈で奥浄瑠璃を聞いたという記載がある。「其夜目盲法師の琵琶をならして、奥上るりと云ものをかたる。平家にもあらず、舞にもあらず、ひなびたる調子うち上て、枕ちかうかしましかれど、さすがに辺土の遺風忘れざるものから、殊勝に覚る。」

- (8) 小島（一九六九）では、例として狂言の「どぶかつちり」の中で勾当の平家の語り部分をあげている。

そもく一谷の合戦敗れしかば、われもく高名せんと馳け廻る程に、^{きびす}眼を切られてにぐるもあり、^{おがひ}顔を獲つられてかかゆる者もあり。入り乱れたる合戦なれば、眼を取つて顔につけ、顔を取つて眼につくる程に、^は生えうず事と眼に髭生え、^{あかがり}顔に輝が二三百、ほかりく切れにけり。

四頁

また成田（一九八五）でも「どぶかつちり」に關し

狂言という平家といえはこれを語るということになっている。『平家物語』を語るのを本来とした座頭がこの話・早物語を『平家物語』として語る所が面白いのである。それほど狂言での平家のしぐさに

滑稽味があつたともいえる。

と記し、この場面が早物語の趣向であつたことを示している。

- (9) 『嬉遊笑覧』卷之六上（音曲）には

【江戸名所記】（寛文二年の刻）境町の書に大さつまが芝居に並びたり欧州には此の天満節の傳はりしなるべしといへるは非なり或説經かたり奥州に行てしばらくこれを興行して有しもの語を聞し彼所には常磐津ぶし長唄などは皆あれども説經かたりなし其所にて音曲などして人を集むるにはまづ座頭の首領黒澤けんげうとやらん云もの、許に至り門人の分になりて興行することなり此者もしかせしに其時座頭も多く居たるが其中の一人淨るりを何やら少し許りかたり聞せしが聞にもたへぬものにて其處にはこれをお國上るりと云ふ是即仙臺上るなり

喜多村信節著『嬉遊笑覧』下

成光館出版部 昭和七年（一九三二） 五六頁

という記述がみられる。

- (10) 小倉（一九三二）では「御國浄瑠璃は昔も今も盲人の語るもので、稽古も師匠から弟子へ口授するのであるから、一定の教科書即ち所謂正本が無く、又その必要もない（二六九頁）」と述べている。そして柳亭種彦著『用捨箱』の、江戸から奥州へ正本を送っていたという記述をあげ、「編者はこの正本といふものを見たことがなく、又見た戸井不比等を聞いたこともない。現に遺つてある御國浄瑠璃本は、編者の知る限では、悉くこの地方の物好きな人の手に成つたと思はれる寫本である。（二六九頁）」とする。

- (11) 江戸時代には中国の白話小説が流行しその翻訳や翻案が行われた。その中に『通俗漢楚軍談』（元禄八年（二六九五）刊）という説本があり、第三卷に「鴻門會樊噲排闥」（鴻門の会）がある。

(12) 大田南畝の狂歌本『をみなへし』の中に「文字六といへる豊後節の淨瑠璃をかたれるもの仙台淨瑠璃をかたりければ」という詞書の後「仙台のことをうつす淨りもそのみちのくのしのぶ文字六」とうたわれている。『大田南畝全集』第二卷（一九八六）岩波書店所収。また、当時の『蜘蛛絲梓弦』の評判に関しては安田文吉（一九九二）『常磐津節の基礎的研究』（和泉書院）で、明和二（一七六五）年一月初演の『蜘蛛絲梓弦』が「空前の大大たりをとった（二〇五頁）」としている。

(13) 大槻（一九一〇）の中には「仙臺の淨瑠璃きかん紙子賣」の文の語り癖として「此淨瑠璃の文の語り癖なり。即ち「雨人な承り」「當年な十五歳」など「ん」の下の「は」を「な」と云ひ「拝見の許され」「先陣の給はり」など「ん」の下の「を」を「の」と云ひ」とある。小倉進平（一九一〇）でも仙台淨瑠璃の語り癖として同様のことが記されている。本文に見る「門の開けもんひらけ」の「の」は「を」の語り癖ではないかと考えられる。

参考文献

大槻文彦（一九一〇）「仙臺淨瑠璃の考」『仙台叢書』第6卷（一九二九）所収

小倉進平（一九一〇）「御國淨瑠璃」『仙台叢書』第6卷（一九二九）所収

小倉 博（一九三二）『仙台郷土資料』第2 無一文館

小倉 巖（一九五八）「御国淨瑠璃」『宮城県史 第14（文学芸能）』宮城県史刊行会

幸田露伴（一九四三）『蝸牛庵聯話』（中央公論社 一九四三）

神戸和昭（一九九三）「近世語資料としての江戸戯作の写実性に関する一

検証——「浮世風呂」における合拗音の表記を中心に」『語文論叢』千

葉大学文学部国語国文学会

小島環礼（一九六九）『浮世風呂の仙台淨瑠璃』『國學院大學近世文学会会報』3

武田 正（二〇〇五）『天保元年やかんの年…早物語の民俗学』岩田書院

成田 守（一九八五）『奥浄瑠璃の研究』桜楓社

安田文吉・安田徳子校注（二〇二〇）『豊後節系浄瑠璃集 伝承文学注釈叢書2』三弥井書店

湯澤幸吉郎（一九三三）『奥州本義經記の考察』松井博士古稀記念論文集 目黒書店

引用資料

『義経記奥州本』安永八年奥付（近藤瓶城編（一九〇二）『史籍集覧』第十六册所収）

式亭三馬『浮世風呂』前編 文化八年 天理大学所蔵本

大田南畝「をみなへし」『大田南畝全集』第二卷（一九八六）所収 岩波書店